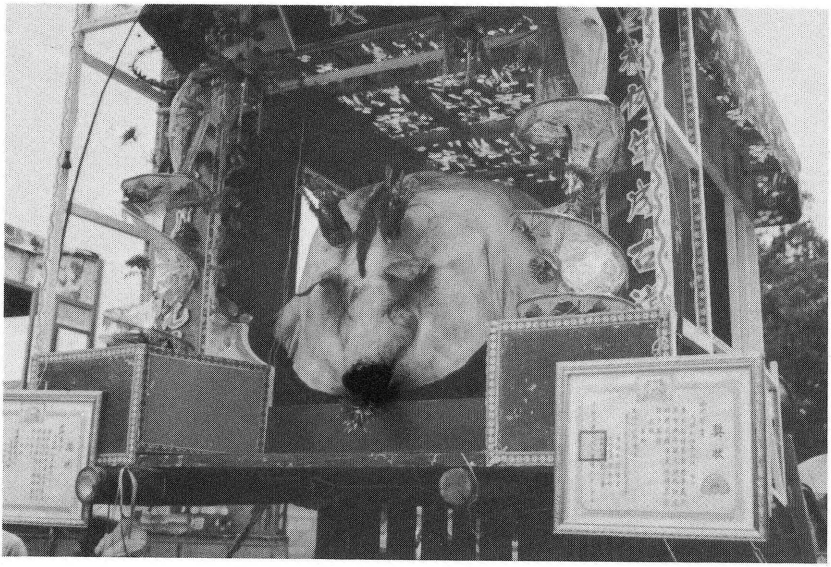
義民節・義民廟　台湾新竹県新埔鎮上寮里



１９７９年農暦７月
植松明石撮影

○義民廟の祭典（上）

酷暑のひるさがり、ロココ風の華麗な廟前の広場に、臨時の供物台が用意され、様々の物売り、参詣人で賑わっている。農暦（旧暦）七月は日本のお盆のように、冥府の鬼門が開かれ、腹をすかせた祀り手のない孤魂が徘徊する月で、人々は御馳走を作って供養する「普度（ポートゥ）」という儀礼をおこなう。義民廟の主神、義民爺は、清朝の頃、官軍をたすけて叛乱匪賊とたたかい死んだ多くの客家（ハッカ）の遺骨を祀ったもので、七月義民節に孤魂と共に盛大にまつられる。客家は漢人の一支派で出身地を広東省東北部、福建省西部などにもち、中国語（八方言に大別される）の客家語を話す人々。台湾漢人はほぼ福建系九に対し客家系一である。

○廟前に供えられた犠牲の豬公（豚）（下）

何とコンクール一等賞のこの豚の重さ一〇四〇斤（620kg）、腹をひらいて内臓を出し、毛をとり、口にパイナップルをくわえ、頭に金花を飾り、台にのせ、数万円をかけて周囲を飾りたてる。そのはではでしいこと驚くばかりである。このためかずらりと並んだ豬公を見ても格別気味悪くもない。義民節担当祭典区ではこの日、各世帯毎に一頭の豚を殺す。この年の祭典区は比較的小さく約千世帯であったので、千頭の豚が犠牲として殺され、重さ上位の三十頭位が廟前に、他は各自の家々の前にずらっと並べられた。屠殺前に豚を見に行ったが、暑さに負けぬよう扇風機にふかれた豚は、前年より玉子その他の栄養物を与えられて肥大し、余りの重さにその足は堪えられず、みんな横たわっており、寝がえりも飼い主の手をかりていた。